博 士（文 学） 杉 浦 康 則

学位論文題名

ヨーロッパ演劇における群集演出の展開

学位論文内容の要旨

本学位論文は二部、全7節から構成されており、序文において本論文の課題設定と方法論及び論述全体の方向性が簡潔に紹介されている。

第1部第1章においては、ヨーロッパ演劇史においてつねに群集演出の観点から論じられてきたマックス・ラインハルトの活動が概観され、その演出理念と上演の成果が再確認される。舞台と観客席を分離する伝統的な上演形態を批判するラインハルトは、両者の距離感を止揚し、舞台上に大群集を登場させて観客との熱狂的な一体化を追求した。「陰鬱な日々の惨めさから人々を朗らかで澄んだ美の空間へ連れ出す劇場」の実現が彼の構想した演出である。とくに1911年のロンドン及び1924年のニューヨークにおいてラインハルトが演出した『奇蹟』の上演が例に取り上げられ、彼の群集演出がその構想どおりの成果を挙げたことが詳細に跡付けられている。

第2章においては、アドルフ・アッピアとエミール・ジャック＝ダルクローズの活動に焦点が当てられる。アッピアの革新的な舞台・照明論とダルクローズのリトミック理論が詳述されるとともに、両者が協力して演出した『オルフェオとエウリディーチェ』の上演(1913年)に群集演出の要素が確認される。ダルクローズは、舞台に関する理論も執筆しており、エキストラの群集が舞台と観客との密接な結び付きを生み出すと主張していたこと、すでに1903年に上演されたダルクローズ作の『ヴォー州フェスティヴァル』にはエキストラの大群集が用いられ、ラインハルトの群集演出と類似の作用が生み出されていたこと、また、このような演出は、ラインハルトの群集演出とはかかわりなく案出されたものであること、が論述される。本論文は、ここにヨーロッパ演劇を新たな観点から論じるための手掛かりを見出している。

第3章においては、演劇史においてラインハルトの演出と同様に群集演出として扱われてきたマイニンゲン一座が取り上げられ、両者の類似性と差異が論証される。舞台上に大勢のエキストラが登場し、群集が主役を演じる点では、ラインハルトと類似した演出手法が認められることは確かであるが、マイニンゲン一座の演出原理は、時代考証を重視し、演出に「歴史的な正確性」を求める点にその特徴がある。舞台と観客の関係に係わる問題は等閑に付され、群集演出も現実の無秩序な運動を繰り広げる群集のリアルな再現に力点が置かれた。1876年の初演以降、繰り返し上演された『ジュリアス・シーザー』に対する

当時の批評の分析から、こうした一座の演出原理が当初の理念どおりの成果を挙げたことが検証されているが、それは、ラインハルトの群集演出のカテゴリーには含まれない群集演出として位置づけられている。

第4章においては、ラインハルトやマイニンゲン一座に先立ち、19世紀中葉のイギリスの演劇界で活躍したチャールズ・キーンが考察の対象となる。とりわけキーンの演出によって初めて大成功を収めたシェイクスピアの『リチャード二世』に対する当時の批評分析から、キーンが「現代のもっとも偉大な考古学者」と称されほど正確に歴史的典拠に基づいた上演を行っていたこと、また、この上演には、原作にない群集場面が挿入され、その群集演出が、原作の改竄に対する一部の批判はあったものの、当時の批評家たちによって革新的な手法として高い評価を得ていたことが示される。同時に、キーンも舞台と観客を結びつける作用に関しては考慮しておらず、結局、キーンによる上演はマイニンゲン一座の演出と同じ段階の群集演出として位置付けられる。

第2部第5章においては、スライドや映画などを用いた「叙事的」表現によって舞台上の出来事の歴史的、社会的因果関係を示す演出を行ったエルヴィン・ピスカートルの活動が論じられる。ピスカートル演出の主人公は、プロレタリアの「群集の運命」であり、「時代そのもの」が「新しい劇文学の英雄的要因」だった。その「群集」表現は、内在的に、つまり、記録映画等によって舞台上に映写される。この「叙事的演劇」と言われるピスカートルの演出理念は、舞台と観客席の仕切りを取り除き、観客自身を政治的劇場の舞台へ主体的に参画させること、劇場を「時代を写す鏡としてのみではなく、時代を変えるための手段」とすることだった。そしてピスカートルの上演作品の分析に基づき、劇場がもはや観客席と向かい合う舞台ではなくなり、一つの政治的な集会ホールと化した状況が資料から跡付けられている。また、本章においては、ピスカートルの新たな「全体劇場」の構想、当時のロシアにおける群集演出についても言及されている。

第6章においては、一般に自然主義の演出家とみなされてきたオットー・ブラームの『織工達』演出が、群集演出の観点から位置付けできることが示される。個々の役者を通して群集の反応を表すという『織工達』の作品構造なども要因となり、ブラームの『織工達』上演においては、舞台上に存在しないはずの群集効果が生み出され、あたかもラインハルトの群集演出に向けられているかのような批評、舞台と観客が密接に結び付けられ、統一が生み出されたとする批評が当時の演劇評論誌等から確証される。また、プロレタリアの群集の問題を扱うというテーマの点において、ブラームの『織工達』演出は、ピスカートルの叙事的演劇に見られる群集表現の前段階として位置付けられている。

第7章においては、群集演出の観点からみたベルトルト・ブレヒトの演劇理論と実践が考察される。まず、ブレヒト自身が彼の「非アリストテレス的演劇及び異化効果」の萌芽的要素をピスカートルに認めていたことが指摘され、同時に両者の基本的な相違点が1929年のバーデン＝バーデン音楽祭におけるブレヒトの『教育劇』上演を基に比較検討される。そして結論において、第6章までの分析を踏まえた上で、ブレヒト演出の再評価が行われ

る。群集演出の方向性が二つに大別され、社会の現状から切り離された物語を、劇場内で完結する形で上演する群集演出の流れがキーン、マイニンゲン一座、ラインハルト及びその同時代人の活動に見出される一方、ブラーム、ロシア群集演出、ピスカートルの上演は、20 世紀初頭におけるプロレタリアの現状を直視し、その問題解決を図ろうとする群集演出であったことが論証される。その上で、異化効果という、感情移入を否定する新たな方法を取ったブレヒトの演出は、ピスカートルも含めたそれ以前の感情移入型の群集演出とは異なり、観客が自ら判断し意思決定を行って演じる新たな群集演出として位置付けられる。結果として、従来の一般的な演劇史からは見えてこない、ヨーロッパ演劇における群集演出の展開が新たに示されている。

学位論文審査の要旨

主　査　　教　授　　山　田　貞　三
副　査　　准教授　　大　西　郁　夫
　　教　授　　清　水　　誠

学位論文題名

ヨーロッパ演劇における群集演出の展開

審査委員会は、本論文が提出されて以後、5回にわたって委員会を開催し、申請論文を慎重に精読して審査するとともに、口頭試問を実施し、十分に審議を重ねて適切な評価に努めた。その結果、本論文に対する以下の記述のような評価に鑑み、審査委員全員が一致して、杉浦康則氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当である、との結論に達し、文学研究科教授会に報告した。教授会は、この報告に基づき審議を重ね、これを承認したものである。

本論文は、19世紀中葉から20世紀初頭にいたるまでのヨーロッパにおける演劇史を、マックス・ラインハルトに代表される「群集演出」の観点から新たに捉えなおそうとする試みである。その考察の射程は、19世紀半ばのイギリスで演出の歴史的正確さを求めて演劇の社会的ステイタスの向上に努めたチャールズ・キーン、20世紀初頭に音楽教育の身体的実践理論（リトミック）を発展させたエミール・ジャック＝ダルクローズ、舞台装置の改革と舞台照明の重要性を唱えたアドルフ・アッピア、自然主義の演出家として知られてきたオットー・ブラーム、「叙事的演劇」の創始者エルヴィン・ピスカートル、そして現代演劇に多大な影響を与え、「非アリストテレス的演劇」として著名なブレヒトの初期活動にまで及んでいる。

本論文の課題は、従来、群集演出とは異なる観点から論じられてきたこうした演出家たちの演出理念や実際の舞台上演に群集演出的な要素を見出し、その類似性、差異、独自性を明らかにしようとした点にある。また、研究方法の特徴は、従来、一般的に行われてきた演劇テクストの分析や解釈ではなく、その演出理論と実践に着目し、実際の上演が当時の観客にどのように作用し受け止められたのか、その受容過程をさまざまな文芸評論誌や新聞、雑誌、演出帳、手記等に基づいて実証的に再構成している点にある。

こうした手法により、群集演出の典型的な演出家ラインハルトを基軸に、他の演出家達の布置関係が明らかにされるとともに、伝統的な上演形態とは異なる群集演出の中にも二つの

大きな潮流が確認されている。一つは、現実の世界から遊離した劇場という芸術的な空間内で自己完結する流れで、キーン、マイニンゲン一座、ラインハルト及びその同時代人達の活動に見出されている。他の一つは、ブラーム、ピスカートル及びロシアにおける群集演出に認められる、20 世紀初頭の社会的政治的状況を反映した、演劇の社会的使命を強調する方向性である。さらに、非アリストテレス的演劇を提唱したブレヒト論を導入することによって、こうした群集演出も基本的には伝統的な感情移入型の演劇に過ぎないことを論証し、結果として、ブレヒト演出の斬新さを改めて浮き彫りにさせることに成功している。異化効果という、感情移入を否定する新たな方法を取ったブレヒトの演出は、群集演出の観点から捉えた場合にも新たな形態の上演方法であることが明らかにされた。

審査委員会においては、本論文が、19 世紀中葉のイギリスから 20 世紀初頭のドイツ・ロシアにおける群衆演出研究という、時代的にも空間的にも広範囲にわたる考察対象を一つひとつ丹念に調べ上げ、その相関関係を膨大な資料を基に実証的に論証した点は高く評価された。

しかし、本論文で取り上げられた群集演出とそれ以前の伝統的な演出形態との関係に十分な論証が尽くされていない点、一次資料の分析を重視するあまりに先行研究への目配りに不十分さが見られ、その意味で説得力を減じている点は否めない。また、本論文の大半は、すでに公刊された個別の論文を基に再構成されており、論述の展開にやや整合性に欠ける個所が散見される。これらの問題点はしかし容易に解決できる課題であり、本論文の成果を全体として損なうものではないと判断された。

なお、審査の方法と経過は以下の通りである。

2011 年 12 月 16 日：　審査委員会発足
2011 年 12 月 21 日：　第 1 回審査委員会　論文の配布と審査日程の調整
2012 年 01 月 18 日：　第 2 回審査委員会　論文内容の検討と問題点の整理
2012 年 01 月 25 日：　口頭試問の実施
2012 年 01 月 25 日：　第 3 回審査委員会　口頭試問の内容検討と評価、学位授与の判定
2012 年 02 月 01 日：　第 4 回審査委員会　審査結果報告書(案)の検討と確認
2012 年 02 月 10 日：　第 5 回審査委員会　審査結果報告書の確定
2012 年 02 月 20 日：　文学研究科教授会報告
2012 年 03 月 05 日：　文学研究科教授会承認